

富來先生を偲んで

大野 保治

富來先生が亡くなられて、早くも半年が経つ。最近になって漸く淋しさがこみあげ、何とも空しい気分に襲われる。

想起起せば、私が私学の別府大学に奉職(昭和二十九年四月―同四十三年三月末)して大分大学教育学部に移ったのは、同年四月一日からであった。当時、教育学部は学科群で構成されており、私が所属する「社会科」は法政学科で、法政科(法律学一、政治学一―欠員)、社経科(社会学一、経済学一)、倫理科(倫理学一、哲学科一、社会科教育一)、地理科(地理学三、社会科教育一)、歴史科(歴史学三、社会科一)の合計十五名(欠員二)だったと思う。先生は法政が私一人だったことから、何かと気配りをして下さり、とりわけ人事と予算の面では何くれとなく良き相談相手になってくれた。学生とのコンパ、それに夏季研究・共同研究調査などでは濫蓄を傾けての研究方法論はどれだけ役だったことか。

先生は学生時代からマックス・ウェーバーに心され、その立場と視点から実にユニークな学説を立てられ、浅学の我々を広く啓蒙して下さった。戦後いち早く、魏志倭人伝の「邪馬台国、女王卑弥呼」を宇佐八幡宮の祭神(第二神―比咩神)に結びつけ、耶馬台国宇佐・耶馬溪説を唱えたりした。

現在、私が代表を勤めている『別府史談会』(昭和六十二年創立、会員百六十人)でも、発会当初から「会報誌」(近く年末に第一三号刊行)に毎回投稿して頂いた。今年一月中旬、「昨年第一二号」の原稿は一番よく出来た。悔いのない記事が書けたと、たいそう嬉しそうな声で電話を下さった。この言葉が最後になるうとは、夢にも思わなかった。亡くなられた二、三月前、同会の入江先生(先生の教え子)から電話があり、「今年(本年度)はもう書けないかも分らないが、翌日になって今年も書くゾ」と奥様を通じて訂正の電話があったとの報告を受けた。逝去されたのは、確かその翌日夕刻だったと思う。先生は亡くなる直前まで、学問研究の灯を灯し続けたのであろう。ただくご冥福を祈るばかりである。

甲 句

春悠に 包まれてゐて 天仰ぐ

もう逢えぬ 人となりたる 余寒かな

師の逝きて 今日百日の ほととぎす

ほろほろと 酔ふて落花の 師と我と

桜散る 尽きることなき 訣れかな